

中学校教員の意識と「学校本位的自殺」 TALIS 2018 データを用いた順序ロジスティック回帰分析

氏 名 村上隆幸 (秋吉ゼミナール)

論文の目次

目次（要旨の節構造ではなく、卒業論文本体の章節構造）をつけてください。

内容

第 1 章 問題の背景

- 1.1 「教員」という労働の特殊性
- 1.2 教員における精神疾患における休職や過労死・過労自殺の現状
- 1.3 本論文の研究関心・社会学的意義

第 2 章 先行研究

- 2.1 教員の労働について
- 2.2 教員のストレス
- 2.3 過労死・過労自殺に関する事例研究
- 2.4 『自殺論』

第 3 章 仮説、および使用データと分析方法

- 3.1 仮説
- 3.2 使用データと調査の概要
- 3.3 分析に用いる変数

第 4 章 仮説の分析

- 4.1 仮説 1 の分析結果：教員は互いに信頼しあうことができないという意識と教員としての職務が精神的・身体的に悪影響をもたらす関連性
- 4.2 仮説 2 の分析結果：私生活を送る時間を確保できていないという意識と教員としての職務が精神的・身体的に悪影響をもたらす関連性
- 4.3 仮説 3 の分析結果：この国や地域では、教員は教育政策の決定に意思を反映できていないという意識と教員としての職務が精神的・身体的に悪影響をもたらす関連性
- 4.4 仮説 4 の分析結果：保護者の懸念に対処

することに対してストレスを感じるという意識と教員としての職務が精神的・身体的に悪影響をもたらす関連性

第 5 章 考察

- 5.1 それぞれの仮説における分析結果の考察
- 5.2 本研究の課題

第 6 章 結論

- 付録 A 記述統計
- 参考文献

論文の要旨

1 本論文の研究関心・社会学的意義

本稿では教員の過労死・過労自殺と『自殺論』にかかる意識、とりわけ後述する「学校本位的自殺」との関連に着目する。そこで研究課題は、「教員の過労死・過労自殺のリスクはどのような意識によって高められるのか」とする。

教員のストレスや過労死・過労自殺の事例研究は進んでいる。しかし、教員の意識と過労死・過労自殺の関連に着目した研究はない。そこで本稿ではデュルケムの『自殺論』に依拠して教員の過労死・過労自殺と教員の仕事や生活に関する意識との関連に着目する。

これまでの研究では教員の過労死・過労自殺は「教員の労働という特殊性」、とりわけ給特法体制の構造上の問題、あるいはストレスなどの心理的要因によって引き起こされると考えられてきた。

しかし、本論では『自殺論』に即して、教員の過労死・過労自殺は社会的要因によって引き起こされるというアイディアを出発点とする。

言い換えると、教員の意識によって過労死・過労自殺が引き起こされる。『自殺論』における自己本位的自殺、集団本位的自殺、アノミー的自殺、宿命的自殺という4つの自殺パターンにかかわる教員の働き方とその影響を受ける意識と過労死・過労自殺との関連を明らかにすることで、教員の過労死等は社会的要因で引き起こされるのかどうか分かる。

1.1 学校本位的自殺とは

時間外労働等への制限がない上、教員の意思が教育政策に反映されない点は社会的規制が弱いといえる。このように社会的規制が弱まることで生じるアノミー的自殺を、筆者は教員特有の自殺として、「学校本位的自殺」と称する。

2 使用データと調査の概要

本稿の分析をするにあたり、TALIS 2018 の日本の中学校教員のデータ、「BTGJPN3」を使用する。

TALIS の調査概要

調査時期 2018 年 2 月中旬～3 月中旬
 調査地域 日本を含む 48 か国・地域
 調査対象 ISCED (International Standard Classification of Education: 国際標準教育分類) 1～3 に相当する学校の教員及び校長
 サンプルング方法 層化二段階抽出法: 「東京 23 区及び政令指定都市の公立校」「人口 30 万人以上の市の公立校」「その他の市の公立校」「町村部の公立校」「国立・私立学校」の 5 つの層に抽出したうえで、教員の基礎情報(年齢、性別、指導教科)を考慮に入れて、原則として 1 か国につき 200 校、1 校につき教員(非正規教員を含む) 20 名と校長 1 名を無作為抽出。
 調査方法 調査対象者が質問紙調査(教員用/校長用)に回答(所要各 60 分)
 サンプルサイズ 3, 387 サンプル

2 結論

図 1 性別、一週間の勤務時間、「職務が精神

的に悪影響をもたらす」の関係

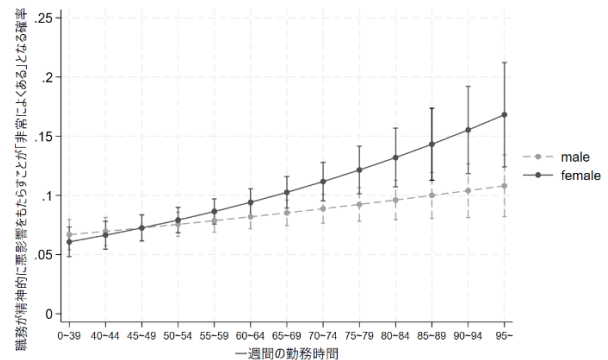
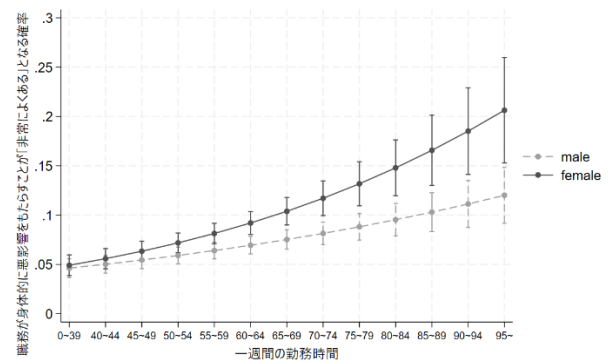


図 2 性別、一週間の勤務時間、「職務が身体的に悪影響をもたらす」の関係



『自殺論』にかかわる教員の意識と過労死・過労自殺には関連があることが本研究でわかった。また、図 1, 2 にある通り、教員の意識と過労死・過労自殺の関連には男女差があり、女性の方が男性よりも一週間の勤務時間が長くなるほど、職務が精神的・身体的に悪影響をもたらすことが「非常によくある」となる確率が上がる傾向にあることが本研究で分かった。さらに、女性において、「学校本位的自殺」では過労死・過労自殺との関連が、その他の『自殺論』にかかわる教員の意識では過労自殺との関連があることが本研究でわかったということが主な知見である。

主要参考文献

Durkheim, É., 1897, *Le Suicide Étude de Sociologie*, Paris, PUF. (宮島喬訳, 1985, 『自殺論』中公文庫.)